『ニルスのふしぎな旅』におけるスウェーデンの近代化とセルマ・ラーゲルレーヴの国家観

日本児童文学学会例会（プロジェクト人魚第 14 回研究会）
於:日本フラワーデザイン専門学校　2014 年 12 月 13 日（土）
中丸　禎子（東京理科大学: nakamart@rs.tus.ac.jp）

1.セルマ・ラーゲルレーヴと『ニルスのふしぎな旅』

(1) セルマ・ラーゲルレーヴ（Selma Lagerlöf, 1858-1940）

〈経歴〉　（☛ 別紙「ラーゲルレーヴ著作リスト」）

1858 年、ノルウェーとの国境地帯ヴェルムランドのモールバッカに生まれる。ラーゲルレーヴ家は、大農場と鍛冶場を所有し、桂冠詩人テグネルおよびイェイイェルと縁戚関係にある名家だったが、近代化に伴い、ラーゲルレーヴが 10 代のころから没落しはじめる。

1882 年、ラーゲルレーヴはストックホルムの教員養成所に入学、1885 年にランスクローナの女学校教員となる。同年、10 年にわたりアルコール依存症を患っていた父が死去。次兄ヨハンが家を継ぐが、1888 年、生家は競売にかけられ、ヨハンはアメリカに移民する。

ラーゲルレーヴは教員を務める傍ら、短編や詩を女性雑誌に投稿。1891 年、長編『イェスタ・ベルリングのサガ』でデビュー。1894 年に専業作家となり、長編『エルサレム』（1901/02）で、1909 年に女性初・スウェーデン人初のノーベル文学賞受賞。『ニルスのふしぎな旅』（1906/07）は 80 か国語以上に翻訳される。1914 年、女性初のスウェーデン・アカデミー（ノーベル文学賞選出で知られる）会員となる。1940 年、買い戻した生家で死去。

▲『ニルスのふしぎな旅』を執筆した時期のラーゲルレーヴ

〈日本における受容〉

- ❄ 児童文学として:『ニルスのふしぎな旅』の翻訳、大人向け作品の「子どもの本」としての翻訳
  - ➢ 野上彌榮子、香川鉄蔵・節、NHKアニメ『ニルスのふしぎな旅』（1980-81）
- ❄ キリスト教文学として:『キリスト伝説集』などの翻訳（個々の短編の絵本としての刊行・キリスト教文学アンソロジーへの収録）
  - ➢ 生田春月（『沼の家の娘』）、イシガオサム、今西佑行（『不思議な旅』）、中村妙子
- ❄ 平和主義文学・「善意の文学」として:ラーゲルレーヴの平和主義運動・反ユダヤ主義批判に着目
  - ➢ 山室静、佐々木基一、柴田治三郎、石丸静雄

☛ 根強い人気を保つものの、北欧史・北欧文学史・北欧文学研究に着目した研究は少ない

〈スウェーデンにおける受容・研究〉

- ❄ 生前:90 年代文学の代表的作家、口承の伝説を再話する「お話おばさん」、女性解放運動の旗手
  - ➢ 高い人気はあるものの、研究対象となることは少なかった
- ❄ 1960 年代:人気低迷、「忘れられた作家」に
- ❄ 1980 年代:書簡の刊行（同性の恋人が複数いたことが判明）、ジェンダー・スタディの流行により、「女性作家」としての研究、伝記研究、受容研究が活発化
- ❄ 2000 年以降、多数の研究書・研究論文刊行

- ヴィヴィ・エードストレーム『生の離れ業』(2003):ラーゲルレーヴの同性愛に触れた伝記的研究
- アンナ・ノルドルンド『セルマ・ラーゲルレーヴの不思議なスウェーデン文学史の旅 1891-1996』(2005):スウェーデン文学史におけるラーゲルレーヴの受容
- マリア・カールソン「読者たちのラーゲルレーヴ」(2008):愛読者からの手紙を分析した受容研究
- アン=ソフィ・ユング・スヴェンソン『大地の娘　セルマ・ラーゲルレーヴとドイツの郷土文学』(2011):ドイツの民族主義文学におけるラーゲルレーヴ受容

〈北欧文学史における位置づけ〉

❄ 1850 年代～:北欧の近代化→**近代文学＝「80 年代文学」と「90 年代文学」**
- 工業化:石炭による鋼鉄精製(近代化以前は木炭による錬鉄生成、木炭生成はパルプ・輸出木材供給へ)
- 都市化:商業・金融業の発達、新聞・出版社創立、中産市民階級の台頭、政治の民主化
- 農村の空洞化:鉄道など交通網の整備、アメリカ移民、家父長制の動揺
- 西欧・アメリカの文学・思想の紹介:デュマ、ディケンズ、クーパー、ドイル、ダーウィン(進化論)、スペンサーやミル(功利主義)、コント(実証主義)、テーヌ(決定論)、フォイエルバッハ(教会批判)

❄ 80 年代文学(自然主義文学)
- 1871 年、ブランデス(D)が連続講義『19 世紀文学主潮』でビーダーマイアー文学、後期ロマン主義文学(アンデルセンなど)を批判したことで始まる
  ※D＝デンマーク、N＝ノルウェー、S＝スウェーデン
- 社会批判、家族制度批判、恋愛・結婚に関する倫理、男性性・女性性
- 女性作家のデビュー(アン・シャルロッテ・レフラー(S・野上弥生子が『青鞜』に翻訳を掲載)など)
- イプセン(N)、ビョルンソン(N)、ヤコブセン(D)、ストリンドベルイ(S)など

❄ 90 年代文学(新ロマン主義文学)
- 80 年代文学の進歩主義・啓蒙主義・科学中心主義を批判。デカダンス、個人主義、精神への関心
- 背景に、政治の保守化、ニーチェとフロイトの影響
- 現実の社会生活ではなく「目に見えないもの」(心理、魂、美、神秘、宗教、過去、自然)が対象
- ナショナリズムと民族主義(「北欧」ではなく「国家」や「地域」に着目)
- ラーゲルレーヴ『イェスタ・ベルリングのサガ』は90年代文学の代表的作品、
- 他に、ヘイデンスタム(S)、カールフェルト(S)、クヌート・ハムスン(N)、オプストフェルダー(N・リルケ『マルテの手記』の主人公のモデル)など

(2)『ニルスのふしぎな旅』(Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige, 1906/1907)

〈作品概要〉

スコーネ地方の小作農の息子ニルス・ホルゲションは、怠惰・不信心で、人間にも動物にも愛情を感じない14歳の少年。3月20日(日)、両親が教会に出かけてひとり留守番をしている時に、偶然トムテ(小人・妖精)を見つけ、捕まえたために、トムテに魔法をかけられる。小人になったニルスは、動物の言葉が理解できるようになるが、これまでニルスにいじめられていた動物たちは、小さくなったニルスに仕返しをしようとする。

一方、ニルスの家で飼われていたガチョウのモルテンは、北へ向かうガンの群に飛べないことをからかわれ、奮起して飛び立つ。モルテンを捕まえようとしたニルスは、一緒に空へ舞いあがってしまい、「ケブネカイセのアッカ」が率いるガンの群とともにラップランドを目指すことになる。

ニルスは、ガンの群やモルテンとともにスウェーデンをめぐって、さまざまな動物や鳥と触れ合い、各地の地理・自然・歴史・伝説、そして人間の英知と努力を知る。ガンの群は、ラップランドを経て、再びスコーネに向か

うが、トムテが出したニルスが人間に戻る条件は、「両親がモルテンを屠ること」だった。

ニルスは、モルテンの命を救うため、ガンの群と旅を続けることを選ぶが、困窮している両親を影から助けるため、アッカの勧めでこっそり一時帰宅する。しかし、モルテンは、自分の元いた家（ニルスの家）を旅の途中で出会った妻ドゥンフィンとラップランドで生まれた子どもたちに見せようと、ニルスに続いて家に帰り、ニルスの両親に絞められそうになる。ニルスは「小人の姿を両親に見られたくない」と思っていたことを忘れ、モルテンを助けるために両親の前に姿を現す。両親が目にしたニルスは、人間の姿に戻っていたばかりか、以前とは違う立派な少年になっていた。予期せず人間に戻ったニルスは、翌11月9日（水）の朝、ガンの群に別れを告げにスミイエ岬に赴くが、ガンたちと言葉を交わすことはできず、飛び去るガンたちを見送る。

※作中には、タイトルの横に月・日・曜日が併記されている。年の記載はないが、月日と曜日が合致するのは、ラーゲルレーヴがラップランド調査旅行を行った 1904 年である。

〈執筆の経緯〉

- ❄ 1842 年:初等民衆教育令（公立学校の設立）
  - ➢ 小学校（småskola／7 歳からの 2 年間）＋国民学校（folkskola／9 歳からの4年間）
    - ✧ 家事・家業労働をする子どもが通わず、1847 年時点での就学率は 52％程度
    - ✧ 1868 年:『国民学校読本』発行、76 年改訂
  - ➢ 上層階級の子弟は私立学校・家庭教師に学ぶ（公教育の質の低さが理由）
    - ✧ 中世の牧師養成所を起源とする学び場（läroverk）から派生した中等学校（realskola）への進学（1905 年以降）も、上層階級の子弟に限られていた。
  - ☛ 庶民と上層階級が分裂した「並立型学校制度」
- ❄ 1880 年:スウェーデン国民学校教員協会創設
  - ➢ 教育内容・方法の充実・改善を目指す教員による
  - ➢ 中心人物フリチョフ・ベルイは、単一学校制度への移行を目指すが、国民学校での教育の質の低さにより難航（ベルイはのち政治家に転身、1891 年国会議員、1905 年・11 年文部大臣）
- ❄ 1890 年代:民主化運動・普通選挙運動（1909 年男子普通選挙、1919 年女性参政権）
- ❄ 世紀転換期:国際的な新教育運動
  - ➢ 教師中心の注入型授業から児童中心の自由教育へ（日本:大正自由教育運動）
  - ➢ 1900 年:エレン・ケイ（S）『児童の世紀』:国民学校教育の批判、子どもの発達段階にあわせた学校教育☛ 新教育運動の支柱
    - ✧ ケイ「本と教科書」（1884）・「愛国主義と読本」（1898）:国民学校の読本は芸術性が低く、保守的・非教育的。創造力・感覚を重視した質の良い文学を読本とすべき
- ❄ 1901 年:国民学校教員協会、読本作成委員会を設立
  - ➢ 中心人物:フリチョフ・ベルイ（国会議員）、アルフレド・ダーリン（国民学校教頭。『ニルスのふしぎな旅』第18章に登場）
    - ✧ ダーリン、国民学校1・2年次（9～10 歳）用の読本の複数の作家による執筆を構想し、候補者の一人ラーゲルレーヴに、ヴァルボルイ・オーランダー（師範学校教員、女性参政権運動家）を通じてコンタクトを取る
  - ➢ ラーゲルレーヴと委員会のやり取りの結果、ラーゲルレーヴの単独執筆が決定。
    - ☛ ラーゲルレーヴ**「子どもたちが充分に知るべき最初のものは、自分たちの国」**
    - ✧ 読本作成委員会は、スウェーデン各地の資料を収集し、ラーゲルレーヴに提供
    - ✧ ヴェルナー・フォン・ヘイデンスタム『スウェーデン人たちとその首領』（1908-10）、スヴェン・ヘディン『極から極へ』（1911）も同じ企画で執筆された

〈問題提起〉

❄ スウェーデンの子どもが知るべき「自分たちの国」をラーゲルレーヴはどのように提示したか

❄ ニルスをはじめとする登場人物たちに、あるべき「国民」の姿はどのように表れているか

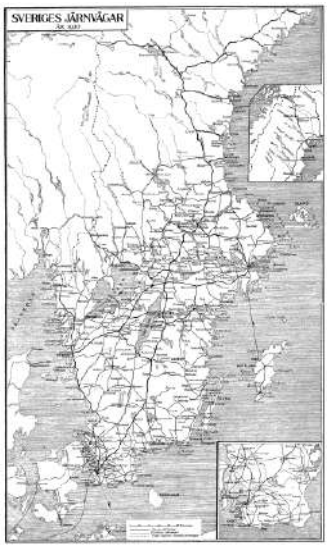
2.『ニルスのふしぎな旅』におけるラーゲルレーヴの国家観

(1)「国土」の規定

〈スウェーデンは「スコーネからラップランドまで」〉

❄ 「北から南へ」

- ➢ ラップランド地方を未開・野蛮の地ではなく、これから発展していく希望の大地として描く
  〔背景〕ラップランドの経済的・地理的意義の変化
  - ✧ 鉄道の敷設（スウェーデンの鉄道敷設は 1850 年代にはじまり、1900 年頃にはラップランドにまで届いていた。ラーゲルレーヴは 1904 年に鉄道でラップランド調査旅行に出かけた
  - ✧ 鉱山資源（キルナの鉄など）・林業の経済的価値
- ➢ 当初、ラーゲルレーヴはラップランドから書き始める予定だったが、実際には、スコーネからバルト海・ボスニア湾沿いにラップランドへ向かって北上し、ノルウェーとの国境沿いにスコーネに帰る物語に
  - ☛ 参考資料〈『ニルスのふしぎな旅』地図〉
  - ✧ 鉄道の敷設・開拓と同じ方向性



▲1910 年の鉄道網

❄ 東西の脅威と南北の不安

- ➢ 東西の脅威
  - ✧ ノルウェー:長くデンマーク領だったが、デンマークのナポレオン戦争敗戦を受け、1814 年にスウェーデンの同君連合となった。その直後から、同君連合解消運動が続き、1905 年にスウェーデンから独立、ノルウェー王国が成立した。
  - ✧ フィンランド:13 世紀以降スウェーデン領で、公用語はスウェーデン語だった。1809 年、一連のナポレオン戦争の結果、スウェーデン王国から分離し、ロシア帝国支配下のフィンランド大公国となる。スウェーデン系の知識人を中心にロシアからの独立運動がおこり、1917 年に独立した。
    （オーランド諸島:フィンランドの一部としてスウェーデン王国の支配下にあったが、1809 年にフィンランド大公国とともにロシア領となる。スウェーデン語母語話者が多く、フィンランド独立運動時（ロシア革命期に高まった）には、フィンランドからの分離とスウェーデンへの再帰属を求める運動が起こった。1921 年、フィンランド共和国の自治領となった。）
- ➢ 南北の不安
  - ✧ ラップランド地方:少数民族サーメ（作中では「ラップ人」）の居住地。スウェーデンのほか、ノルウェー、フィンランド、ロシアの北部にまたがる。18 世紀以降スウェーデン領となり、同化政策が行われた。1809 年、フィンランドとともに、旧ヴェステルボッテンの一部がロシア領となる。
  - ✧ スコーネ地方:17 世紀までデンマーク領、18 世紀までデンマークとスウェーデンの間で領土争い。大北方戦争（1700-1721）でスウェーデン領となり、同化政策が行われた。
- ➢ デンマーク:北欧の中では、スウェーデンと並ぶ大国。ナポレオン戦争敗戦以来、国土の縮小が続き、19 世紀は、シュレスヴィヒ＝ホルシュタインの帰属をめぐってプロイセンとの係争が続いていた。

(2)「国民」の姿

〈ニルス・ホルゲション〉

❄　怠惰で愛を知らず、信心がなく、動物にも意地悪→勤勉で友情に篤い、「立派な国民」として帰宅

〔引用1〕
〈五月のバラ〉〔引用者註:ニルスの家で飼われている牝牛〕の目には、ニルスはでていったときと同じように小さく、着ているものも変わりばえしませんでしたが、以前とはまったくちがって見えました。
春にでていったときのニルスは足どりが重く、のらくらとしていて、声もはっきりせず、ねむそうな目をしていました。
ところがいまのニルスは、身のこなしは軽く、話し方ははきはきとしていて、目にも生気があります。体は小さいけれど、ニルスに対して尊敬の念を抱きたくなるほど、しっかりとした態度です。ニルス自身がにこやかにしていなくても、ニルスを見た人は気持ちが晴れやかになるにちがいありません。(菱木訳『ニルスのふしぎな旅』下巻、p.504-505。以下、引用には巻数・ページ数のみを記す)

❄　ニルスを「尊敬すべき少年」にしたもの

- スウェーデンの地理と歴史
- 動物とのふれあい・ケブネカイセのアッカの教え
- ガチョウ番の少女オーサとの関わり

〔引用2〕
ニルスは変わった子どもでした。これまで生きてきて、だれかを心から好きになったことがないのです。お父さんも、お母さんも、先生も、学校の友だちも、近所の男の子たちも、とくに好きではありませんでした。みんながニルスにさせたがったことは、遊びにしろ仕事にしろ、つまらないことばかりだったからです。ニルスと同じように原っぱでガチョウ番をしていたオーサという女の子と弟のマッツとは、わりとよく口をききましたが、そのふたりにしても、すごく親しかったわけではなく、大好きな友だちとはいえませんでした。(上、p.107)

〈オーサ〉

❄　ニルスが小人になる前に、スコーネ地方で一緒にガチョウ番をしていたニルスと同い年の少女。ニルスと時を同じくして、弟のマッツとともにラップランドを目指して北上。複数回登場する唯一の人間。

- 第 15 章で、スモーランドに来たニルスは、スモーランド出身のマッツが話していた伝説を思い出す。
- 第 16 章で、スモーランドの家に帰宅したところ、その家はニルスを巻き込んだ動物たちの抗争により、火事になっていた。火と狐から逃れようとするニルスだが、家に戻った二人がオーサとマッツであることに気付くと、全てを忘れて声をかける。
- 第 21 章で、ニルスが上空から落とした木靴を拾い、ニルスの名前が書いていあるのを発見
- 第 25 章で、わたっている途中の氷が割れ、ニルスの指示で助かり、木靴を返す
- 第 44 章前半で、ラップランドに到着したオーサの過去が語られる。オーサはスモーランドで、機織り用の筬(おさ)を作る職人の父ヨン・アッサルソン、母、4 人の姉、マッツと家族で筬を作りながら貧しくも楽しく暮らしていた。しかし、「ジプシーに、自分に親切にするものは自分と同じ病になる呪いをかけられた」とする旅の女を泊めた後、4 人の姉は女と同じ病気で死ぬ。親切が呪いで返される理不尽に耐えられなくなった父は家を出ていく。母、オーサ、マッツはスコーネに移り住むが、母も間もなく同じ病気で死去。オーサとマッツは、講習会でその病が結核であること、洗濯と掃除で予防できること、母と姉たちが病気になったのは呪いのせいではないことを知り、父に真実を告げるため、父がいるというラップランドを目指していた。
- 第 44 章後半で、鉱山の町マルムベルイェットに滞在中、マッツは、発破で爆破された岩の破片にあたって命を落とす。オーサはマッツのために立派な葬儀を執り行う。
- 第 45 章で、オーサは父がいるはずのサーメの集落を尋ねる。サーメの長老オーラ・セルカは一計を案じ、ヨンに、スウェーデン人の少女を養女にしたいと話す。サーメ語を習得し、暮らしにもなじんでいるヨンだが、サーメがスウェーデン人を養子にすることに反対するうち、その少女がオーサであることに気付く。オーサと話して家族の病気の真実を知ったヨンは、生気を取り戻す。しっかりして大

人のようだったオーサは、父と再会して子どもらしさを取り戻す。

- 第 54 章で、ニルスの一時帰宅と同じ日に、ヨンとオーサがニルスの両親を尋ねる。

❄ ニルスが人間（大きく、立派で、結婚可能な男性）に戻るきっかけをあたえる

- ニルスに、小人であることを「恥ずかしい」と思わせる

〔引用3〕
ニルスはなにもかも忘れて、子どもたちにかけよると、大きな声でさけんだのです。
「やあ、ガチョウ番のオーサ！ちびのマッツ！」
ニルスがヨードベリヤの畑でガチョウ番をしていたとき、となりの原っぱでは、このスモーランドからやってきた姉と弟が、ニルスと同じようにガチョウの番をしていました。ニルスはとなりの原っぱにふたりの姿を見つけると、石垣の上を走っていっては、「やあ、ガチョウ番のオーサ！ちびのマッツ！」と呼びかけたものでした。
けれどもいま、ふたりのほうは、小さな小人が両手をひろげて走ってくるのを見ると、すっかりおびえてしまい、抱きあったまま、おずおずとあとずさりをしました。
ニルスはそれを見て、ようやくわれにかえりました。魔法にかけられて小人にされてしまった姿を、この子たちに見られるほどみじめなことはありません。もう自分がこの子たちと同じ人間ではないという、恥ずかしさと悲しみで胸がいっぱいになり、ニルスはきびすをかえすと、ふたたび全速力でかけだしました。（上、p.314）

〔引用4〕
事故〔引用者註:マッツの鉱山事故〕のあと、ニルスはなんとしてでも、ひとりぼっちになったガチョウ番のオーサを助けてあげたいと思い、奔走しましたが、父親が無事見つかると、オーサのためにすることもなくなり、それからは遠出もせずに、ガンたちといっしょに、ずっと山の谷間ですごしました。
そして、モルテンの背中にのって家へ帰り、もとの人間にもどれる日を待ちこがれるようになりました。オーサがふつうに口をきいてくれて、鼻先でドアをバンとしめられたりしない人間にもどりたいと思ったのです。（下、p.368）

- ニルスの結婚相手？

〔引用5〕
ニルスには、人間ではなくなったということの意味が、ようやくはっきりとわかってきました。
ぼくは、すべてを失ったんだ。もう、他の男の子たちとは遊べないし、お父さんからこの農家をひきつぐこともできない。大きくなって、結婚することもない……。（上、p.30）

〔比較1〕サーメのもとにとどまらないオーサ
・オーラ・セルカの養女にならない
・オーラ・セルカの息子アースラーク（スウェーデン人の学校に通い、スウェーデン語が話せる）は、サーメの少年とスウェーデン人の少女が結婚し、ラップランドで暮らしたという昔話をするが、オーサはアースラークと結婚しない

〔比較2〕後を継ぐ息子:遊ぶ・仕事をする・結婚する・跡を継ぐは、「一人前の男性」の条件
なぜなら、彼女の子どもはほかの皆と同じようになり、彼女は彼が遊び、跳ね回るのを見ることができ、彼が学校に行って読み書きを習うのを見ることができ、彼は斧を操り鋤の後ろを行く強い若者になり、妻を得て家長として古い屋敷に住むことができるだろうからだ。（『エルサレム』）

〔比較3〕病気の少女:少女は、「遊び、飛び跳ねる」ことから除外される〈オーサも物静かな少女〉
［語り手になりたいと望んだのは、男の子ではなく］、女の子で、病気だったために、他の子どもたちのように遊んだり、跳びはねたりできない子でした。その代わり、彼女の一番の喜びは、本を読んだり、お話を聞いたりして、世の中で起こったあらゆる偉大なこと、珍しいことを知ることでした。（「あるサガのサガ」）

❄ オーサ自身は、正気を取り戻した父に保護される存在になる

〔引用6〕
ふたりのようすは、数時間前とはがらりと変わっていました。
ヨン・アッサルソンは、背中をまるめてはいません。首もうなだれてはいません。長いことさがし求めてきた答えを得られた目には、きらきらと明るい光がさしています。
オーサもまた、これまでのように神経質に、あたりに注意をはらってはいません。心から信頼できる大きな支えを得たいま、オーサは本来の子どもにもどっていくようでした。（下、p.362）

〔引用7〕
「まあ、ニルス！」喜びの声をあげたのは、お母さんも同じでした。「こんなに大きく、りっぱになって！」〔中略〕それでもまだ、ニルスは敷居のところに立っていました。小人のような自分を、お父さんたちが喜んでむかえてくれることが、ふしぎでならなかったのです。
けれども、お母さんに抱きしめられて家の中に入ると、ニルスにもようやくわかりました。
「お父さん、お母さん、ぼく、大きくなったよ。人間にもどれたんだ！」ニルスは、大きな声でさけびました。（下、

p.517-518)

〔比較1〕『ポルトガリエンの皇帝』(1914)
廃人となっても娘を庇護する父ヤン・アンデルソン　※「ヨン」と「ヤン」は、どちらも「ヨハネ」に由来

〔比較2〕「1909 年 12 月 10 日のノーベル賞受賞演説」(1909)
夢に出てきた父にノーベル文学賞の受賞を報告

〔比較3〕『ニルスのふしぎな旅』第 49 章
「スウェーデンのことを書こうと思っている女の人」が人手に渡った生家モールバッカを訪ね、ニルスと会い、これまでの話を聞く。「この屋敷を恋しく思っていることを、ハトにたくして父に告げたら、ずっと悩んでいた本についての助けがすぐに得られた。これが、私がおねがいしたことへの、父の答えなのかしら……。」(下、p. 432)

☛ オーサはニルスとパラレルなルートで旅をするが、「大きく、りっぱになる」のではなく、「子どもにもどる」
ラーゲルレーヴ作品の中では、「(廃人となった)父に庇護される娘」の系譜に属する

〈ケブネカイセのアッカ〉

❄ スウェーデンで最も高いラップランドのケブネカイセ山(標高 2103m)出身の雌のガン。100 歳を超え、叡智・人格ともに優れ、動物たちから一目置かれる存在。旅の全般にわたって、ニルスを教え導く。

〔引用8〕
ニルス〔引用者註:前日に人間に戻り、アッカの群に別れを告げに来た〕はゆっくりと立ちあがると、アッカのそばに行きました。そしてアッカをなでたり、やさしくぽんぽんとたたいたりしました。同じことを、イクシとカクシにも、コルメとネリエにも、ヴィーシとクーシにもしてやりました。この七羽は旅の最初から、ずっとニルスといっしょだった経験豊かな年よりのガンたちです。(下、p.523)

- ニルスにスウェーデンの地理を教え、人間にとっての貨幣の価値や国境の価値を知る
- アッカ(Akka)＝フィンランド語で「おばあさん」
- イクシ(Yksi)、カクシ(Kaksi)、コルメ(Kolme)、ネリエ(Neljä)、ヴィイシ(Viisi)、クウシ(Kuusi)＝フィンランド語の数字1～6

☛ ラップランド地方に住む、フィンランド系の異民族
〔比較〕1809 年、スウェーデン領ラップランド地方の一部は、フィンランドとともにロシア領となった

❄ ニルスの「遍歴」に「異分子」として付き添うが、ニルスを自分たちの価値観には抱き込まない
〔比較〕物分かりの良いサーメのオーラ・セルカとアースラーク

❄ 「年より」＝旧世界／自然の象徴。若者ニルスに席を譲る。オーラ・セルカやアースラークがスウェーデン領ラップランドにとどまるのに対し、ニルスと別れた後は「外国」へ去る。
〔背景〕当時のスウェーデンでは、サーメの文化(観光資源)は保護されたが、領内のフィン人の文化保護はなかった。

〈名前〉

❄ 父称＝父の名前＋「息子」「娘」(ファミリーネームではない):作中では、男性にのみ父称がつく

- ニルス・ホルガション(Nils Holgersson)
- ホルゲル・ニルソン(Holger Nilsson)　※ホルゲルの父(主人公ニルスの祖父)も「ニルス」という名で、主人公は祖父の名を継いだことが分かる
- ヨン・アッサルソン(Jon Assarsson)
- 女性のオーサは、「オーサ・ヨンスドッテル」とは呼ばれない
- 大人になれないマッツは、「マッツ・ヨンソン」とは呼ばれない
- ガンの群は、「ケブネカイセのアッカ」など、出身地＋ファーストネームで呼ばれ、父称はない

☛ 父称がある＝父のあとをついで大人になる

❄ キリスト教由来の名

- ニルス＝ニコラウスの短縮形。
- モルテン（Mårten）＝マルティンのスウェーデン語形。聖マルティンの祭日には、ガチョウの丸焼きを食べる
- ヨン＝ヨハネの短縮形
- マッツ（Mats）＝マティアス（マタイ）の短縮形

〔比較〕

- オーサ（Åsa）＝北欧語由来。「女神」の意。
- ホルゲル（Holger）＝北欧語由来。「島」と「槍」に由来。
- 『イェスタ・ベルリングのサガ』の主人公イェスタ、『エルサレム』の主人公イングマル＝北欧語由来

☛ 北欧の「異教性」（ゲルマン神話由来）を体現しない主人公とその「親友」モルテン

〈国民ニルス〉

❄ 父の跡を継ぎ、結婚する男性

- 自立する男性⇔父に庇護される女性オーサ
- キリスト教徒である⇔サーメ、ガンの群
- 定住する⇔サーメ
- スウェーデン国内で暮らす⇔ガンの群

〔参考文献〕

- Selma Lagerlöf: Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige. Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1998
- Selma Lagerlöf: En saga om en saga. I: En saga om en saga. Liljekronas hem. Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1984, s. 5-16
- Selma Lagerlöf: Tal vid Nobelfesten 10 december 1909. I: Troll och människor. Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1984, s. 149-154
- Selma Lagerlöf: Kejsarn av Portugallien. Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 2005
- セルマ・ラーゲルレーヴ『ニルスのふしぎな旅』（上・下）菱木晃子訳、福音館書店、2007
- セルマ・ラーゲルレーヴ「受賞演説」佐々木基一訳、『ノーベル賞文学全集18』所収、主婦の友社、1971、14-18 ページ
- セルマ・ラーゲルレーヴ『ポルトガリヤの皇帝さん』イシガオサム訳、岩波書店、2002

- Lars Elenius: Selma Lagerlöf och Norrland. Nationella idealbilder i Nils Holgerssons underbara resa. Maria Karlsson &Louise Vinge (red): I Selma Lagerlöfs värld. Fjorton uppsatser. Stockholm (Hatt Rare Books) 2005, pp. 182-209
- Anna Nordlund: Selma Lagerlöfs underbara resa genom den svenska litteraturhistorien 1891-1996. Stockholm (Symposion) 2005
- 秋朝礼恵「スウェーデンにおける教育改革―1940 年代における時代背景と合意形成の過程を中心に―」『ソシオサイエンス』Vol.13、早稲田大学社会科学総合学術院、2007、pp. 1-16
- 中丸禎子「日本における北欧受容―セルマ・ラーゲルレーヴを中心に」、『北ヨーロッパ研究』第 6 号（北ヨーロッパ学会）、2010 年、pp. 51-60
- 村山朝子「地理読本『ニルスの不思議な旅』の成り立ち」、『茨城大学教育学部紀要　人文・社会科学・芸術』（60）、2011 年、pp. 21-41